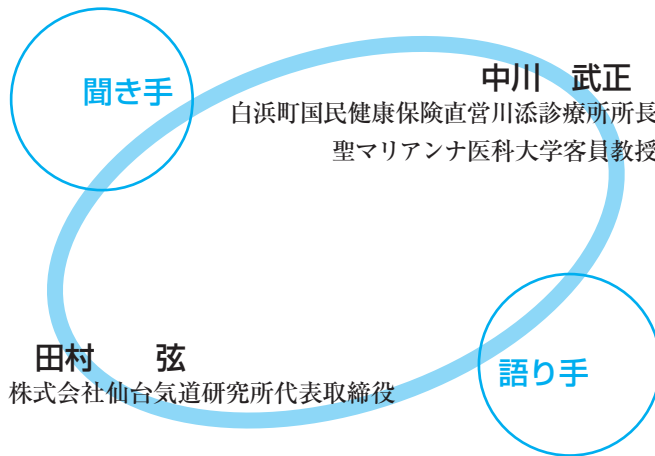


成人喘息治療における吸入ステロイド薬 —過去・現在・未来—



対談「わが研究を語る」では、一つの研究テーマに真摯に取り組んでこられた先生方から、その研究に着手されたきっかけやその成果、現在の研究から今後の展望についてまでのお考えをお聞きしてまいります。今回は、吸入ステロイド薬(ICS)を用いた喘息治療に早くから着手され、また気道疾患に関する研究の第一人者でもある株式会社仙台気道研究所代表取締役の田村 弦先生をお招きし、「成人喘息治療における吸入ステロイド薬—過去・現在・未来—」をテーマとしてお話をうかがいます。
(聞き手：中川 武正)

80年代から重症例に吸入ステロイド薬を導入

中川 吸入ステロイド薬(inhaled corticosteroid；ICS)が本邦で発売されたのは1978年のことですが、田村先生は現在に至るまで、常にICSを用いた薬物治療の第一線に立ってこられました。まず、先生とICSとの出会いについてお話しいただけますか。

田村 1978年といえば、私が東北大学第一内科に入局した年にあたります。学生時代には全く面識がなかった滝島 任先生に許可をいただき喘息グループに配属されたのが縁で、そのまま現在に至ります。当時は重症発作で来院する患者さんが多

く、大変な毎日でした。

そのころ、仮にA先生としますが、東北大学の外科系の教授で喘息発作のためたびたび入院されている方がいました。A先生は全身性のステロイドで改善するものの、退院してはまた発作で入院することを繰り返していました。3回目の入院となった1985年末ごろ、私は滝島先生から教授室に呼ばれ「田村君が主治医になるように」といわれ、これがICSと出会うきっかけとなりました。

私はそのころまでICSの存在そのものを知らなかったのですが、A先生はステロイドがあれば大丈夫なのに、それが切れると発作になるということで、何かよい薬はないかと探しました。当時の東北大学には吸入ベクロメタゾンとしてアルデシ